

彙報

●京都帝國大學文學部史學科本學年講義題目

國史

(講義
種別)

普通

三浦教授

國史概説

毎週

西田教授

國史概説

特殊

三浦教授

織田豊臣時代の文化

西田教授

古代の文化

今西教授

朝鮮古代史(第二・三學期)

喜田講師

日本民族史(第二學期)

大家講師

日歐外交史

演習

三浦教授

中世の社會

西田教授

日本文化史の諸問題

東洋史

普通

桑原教授

東洋史概説

羽田教授

東洋史概説

授の筆になつたものである。本冊は十六章に分たれ東老灘附近遺跡の地形と地質、單陀子島と高麗寒臺地の發掘と遺物包含状態、單陀子發見遺物(石器、骨角器、單色、彩色土器、埋葬墓等)高麗寒發見遺物(石器、骨角器、玻璃片、土器、鬲及甗形土器、銅器、鐵器、古錢)、兩遺跡の關係と年代、結論として該遺跡の考古學的價値を以て結び附録として清野博士の單陀子發見人骨、齋藤博士による古鐵片の二編がある。此地發見遺物は何れも主要なる地位を占むるものであつて精密なる土器分類は彩色土器乃至鬲甗の新知見と共に東亞に於ける土器論の一基礎をなすものと云へる。而して遺跡の示す文化は遺物の考究により西紀前一二世紀のものとして人骨測定による傍證と相待つて漢民族の一殖民地であるを推斷されてゐる。要するに本冊の使命が此等の遺物の考究に當りヨリ精密にヨリ完全なる學術的調査を遂行する點にあつて就中本遺跡が考古學上最も重要な提供をなすものは繰り返すまでもなく東亞に於ける土器論の一基礎を形成したることであらう。(和英兩文菊二倍版、圖版六十八、挿圖四十二、定價拾八圓、東京神田駿河臺、刀江書院發行)(島田)

特殊 桑原教授 史記漢書の研究 二

矢野教授 支那近代外交史特殊問題 二

羽田教授 回經史 二

那波助教 開元天寶時代(前學年の續き) 二

演習 矢野教授 中國近百年史資料(第一・二學期) 一
支那古代の諸問題(第一學期問題) 一
支那古代の諸問題(第二學期問題) 一
支那古代の諸問題(第三學期問題) 一
報告

羽田教授 二十二史劄記 一

西洋史

普通 中村講師 西洋史概説(第一部) 四〇
時野谷助教 西洋史概説(第二部) 二

特殊 濱田教授 希臘考古學 二

矢野教授 支那近代外交史の特殊問題 二

大類講師 西洋中世史(學期未定) 四〇

大塚講師 日歐外交史 二

演習 濱田教授 Goldenhild, Down of European Civilization. 二

時野谷助教 Riess Ludwig: Englische Geschichte, hauptsächlich in neuester Zeit. 二
Lamprecht, Porträlgalerie aus der Deutschen Geschichte. 二

史學研究法

普通 西田教授 史學概論 二

地理學

普通 石橋教授 人文地理學概説 二

小川教授 自然地理學概説 二

特殊 石橋教授 人種地理 二

小川教授 日本及東亞の地誌 二

小川教授 地圖學 一

中村新教授 亞米利加誌(第二學期) 二

石橋教授 地理學實習(第一部) 一

春本講師 地理學實習(第二學期) 二

濱田教授 政治地理學の諸問題 二

考古學

普通 濱田教授 考古學概説 二

特殊 濱田教授 希臘考古學 二

梅原講師 東洋考古學 二

演習 梅原講師 考古學實習 二

副科目

中村直助教授 古文書學概説 二

三浦教授 史料解題及講讀 一

今西教授 朝鮮史籍解題及講讀(第二・三學期) 二

澤村助教 日本美術史概論(哲學科講義) 二

喜田講師 國史地理(第二學期) 二

デ、ロース講師 日蘭關係史 二

那波助教 東洋史講讀 二

山根講師 地形學(理學部講義) 二

金關助教 人類學 二

濱田教授 考古學講讀(Goldenchild, Dawn of civilization) 二

ネブスキー講師 露語 二

田中助教 羅典語(田中秀央著 新羅甸文法) 二

菊池講師 希臘語(White: First Greek Book) 二

松本講師 亞拉比亞語(アラビヤ文法) 二

小西教授 教育思想概説 二

● 昭和四年卒業論文題目

京都帝國大學文學部に於ける本年史學科卒業論文の題

目左の如し(△印選科生)

國史專攻

德川時代ニ於ケル賤民階級ニ就テ 小野 勇

士族階級の變質ニ其社會的影響特に授産問題に就

いて 布村 安弘

條約改正ニ基督教問題 小島 眞

明治政府初期ノ宗教政策(神佛ニ教ニ就イテ) 田中 一三

興隆期の江戸に於ける上方文化(特に平民文化)の

移入に就テ 浦上 清市

明治維新の財政政策特に御用金及び太政官札に就

いて 船津 勝雄

室町時代の武家階級に就いて(特に應仁文明前後

に於ける考察) 寺尾 宏二

東洋史專攻

明の陳誠の使西域記に就いて 堀内 美廣

北魏の佛教 横田 高明

成吉思汗の札撒に就いて 秋貞 實造

元代茶法考

森 鹿三

西洋史專攻

一四九八年より一五一五年に至る葡萄牙の印度を

中心とする征服經營

大内 優徳

羅馬法は如何にして英國に入りしか

戸倉 廣

最近外交史上ニ及ボセル Edward VII ノ影響―特

ニ日英同盟及ビ日露戰役ヲ中心トシテ

近間 利輔

Canning ト Monroe 主義トノ關係

村中 八郎

ゴシック美術の一考察

藤井 謙三

古代 Babylonia ヲ Elam ミノ文化上政治上ノ相互

關係に就いて

赤尾 藤市

十九世紀初頭の普魯西（主としてシュタインの改

革について）

佐知 弘文

中世初期の西歐に於けるモナスチシズムの發展

鈴木 成高

イリアス及びオヂッセウスの背景の歴史的研究

△原田 種夫

ビスマルク退職ヨリ大戰破裂ニ至ル間ノ歐洲外交

稻葉 常楠

地理學專攻

木曾山塊の交通地理

宮川 善造

伊賀に於ける聚落と人口の分布

村松 繁樹

和泉山脈西北部ニ於ケル産業地理學的考察

野中 健一

印南野附近の人文地理

松下 清雄

大阪市ノ地理的生成トソノ發達

田中 博

考古學專攻

祝部土器の研究

小川 五郎

東洋古代裝飾史上の一問題としての漢代連續波狀

文様

長廣 敏雄

飛鳥式建築ノ柱ニ就イテ

佐々木信三郎

日本石器時代遺物ノ種類ト分布

三須 桂樹

●京都帝國大學第二十回夏期講演會

京都帝國大學は學術普及の爲め例年の如く来る八月一

日より夏期講演會を開催して一般有志の聽講を許すとい

最近世史專攻

ふ、講演科目中、史學考古學に關係あるもの左の如し、
(詳細は京都帝國大學本部に照合すべし)

支那の古代法律(主として唐律と明律) 文學部教授 桑原 陸藏

科外講演

悉曇學の傳來と其發達 文學部助教授 原 眞乘

露西亞の博物館と其考古學的調査事項(幻燈使用)

文學部講師 梅原 末治

●帝國學士院授賞式

帝國學士院は去る四月二十六日同院に於て授賞式を行
ひたるが、其内、史學地理學に關する受賞者左の如し。

恩賜賞

地球及地殻の剛性並に地震動に關する研究

志田 順

帝國學士院賞

東洋音樂の研究

田邊 尚雄

桂公爵記念賞

日本甲冑の新研究

山上 八郎

●京都帝國大學史學科學生朝鮮見學旅行(下)

十月二十二日(顯陵―滿月臺―善竹橋) 〔松陽書院―南大門〕

早朝五時二十五分平壤を立つて十一時三十五分開城に
着いた一行は驛前鐵道公園で暖かい秋陽を浴びながら晝
食を濟ませ、高麗の舊都開城見學にこ出で立つ。

高麗の太祖の陵墓を漢魏の故事に據つて作るやうにミ
の遺命に任せて出來たのが顯陵である。契丹蒙古の異民
族が屢侵寇するにつれて此陵墓は度々移動された爲め高
麗式王陵の形式を喪失した部分がある。紅箭門を入れば
丁字形の祠堂に「高麗太祖王顯陵神惠王妃柳氏附」なる額
が懸つてゐる。墳陵は十二角形をなし陵側面の屏石の各
面には其方位に相當する十二支獸の神像を陽刻してある
陵の四隅には石獸、前面には長命燈及び供物をのせたら
しい石床がある。

自動車を引返して高麗王宮址なる滿月臺へ急ぐ。滿
月橋を渡り神鳳門、閭闔門址を過ぎ所々齒の抜けたやう
な危い石段を上るに無數の礎石が並び一群毎に「何々殿
址」云ふ石標が目立つ。會慶殿門、會慶殿、長和殿、元
德殿、萬齡殿、長慶殿が山畑式に段々になつて茫々生

ひ繁る雜草の中に整然たる礎石ミ燹瓦の破片を遺し規模
壯大で其昔金殿玉樓臺を聯ねた壯觀を思ひ浮ばせ、道に
四百五十五年の社稷を保ち半島に王國を立てゝゝゝた高麗
王宮であるこ頷かせる。なほ此地一帯には當時使用され
た古瓦破片が累々ミ散布して居る。

善竹橋は高麗朝末期儒臣の中心勢力たる鄭夢周が武臣
の棟梁李成桂一派の爲に暗殺された所で橋上の一班
痕は彼れの鮮血ミ傳へられる。橋の傍に善竹橋碑があり
その附近に二個の大理石の碑を納めた碑閣がある。一は
李朝英祖十六年來遊の際に建てた「御製御筆道徳精忠互
萬古泰山高節圃隱公」の碑であり、他は李太王九年來遊
の際に建てた「御製御筆危忠大義光宇宙吾道東方賴有公」
の碑であつて各、碑背に鄭氏の事蹟を刻してゐる。善竹
橋を隔る數丁の所に松陽書院を見る。鄭夢周の學徳を追
慕し且その徳化を報謝する爲に設立された書院である。
次に開城市街の中心にある南大門に行く、樓上には京
城の西本願寺別院の鐘等ミ共に朝鮮四大名鐘の中に數へ
られる梵鐘が懸つてゐる、高さ十尺七寸直徑六尺餘中央

の腰帯には皇帝萬歲、法輪常轉國王千秋、佛日增輝の文字
が鑄出される。歸途中田市五郎氏宅に立寄り、同氏所藏
の陶器、銅器を見た。定窯白磁青磁の象篋、搔下手の逸
品や此地方出土の鏡鑑類に優品を多く見受けた。

午後四時十分開城驛發の汽車で京城に向ひ更に夜行列
車に乗つて百濟の古都扶餘に向つた。

十月二十三日(百濟軍倉跡—泗此樓—平濟宮—
陳列館—百濟王陵—海烟寺)

午前五時論山驛に着き未明扶餘半月城に登る。有名な
百濟軍倉跡は塹で圍まれ多くの古瓦の破片を遺してゐる。
十一代義慈王二十年百濟が唐の蘇定方、新羅武烈王の聯
合軍の攻撃を受け山城陥落當時兵燹に罹つた米麥豆の類
が尙ほ地中に存すミ云はれる。唐將蘇定方の凱旋に際し
兵一萬を附して都城を鎮せしめた都將劉仁願の碑は軍倉
跡の隣にある。多年草莽の間に顛倒してあつた爲め著し
く原形を損じ碑面は磨滅して文字が纔に残つてゐる。道
を轉じて山城址を見る。一に泗洑樓ミ稱し登臨するミ白
馬の江流脚下を繞り水村山郭長汀曲浦一望の内に展開し

て風光の明媚云はん方なかつた。泗泚樓を降つて山を下るに深潭に臨んで斷崖絶壁を爲す所に落花巖がある。百濟山城將に陥らんとする時後宮の妃嬪等が逃場を失つて巖頭から身を深潭に投じ。百濟滅亡の最後のページを飾つた所といはれる。朝鮮の諸地方にある所謂落花巖傳説の一つである。百濟王冥福祈願の名刹とされる皐蘭寺より舟を備つて白馬江に泛べ。悠々ミ江を下つた。

午前八時半一行は扶餘郡守白南軫氏の案内に依つて「大唐平百濟塔」を見る。五層の石塔、高さ三十四方方十二尺、最下層に碑銘がある。懷素の靈筆に成る四六駢體の文を以て塔設立の由來を述べてゐる。

原夫皇王所以朝萬國制百靈清海外……………邢國公蘇定方……………逆命者則肅之以秋霜、歸順者則涵之以春露。一舉而平九種、定三韓……………

以て得意滿面たる唐將蘇定方の風貌をうかがふことが出来る。更に

其銘曰……………天降飛將。豹蔚龍驤。弓含月影。劍動星芒。猊貅百萬。雷撼風揚。……………百獮授首。逋誅請命。

威惠□□。邊隅已定。嘉樹不剪。……………拒天關以永固。橫地軸以無窮。顯慶五年歲在庚申八月己巳十五日癸未建。洛州河南權懷素書。

意氣軒昂たる唐軍の面目躍如と現れてゐる。顯慶五年は我が齊明天皇の六年、唐の高宗即位十一年である。塔の北方には百濟時代の石佛とその周圍には礎石土壇があつて寺院址なることを想像せしめる。此處に至つて再び平濟塔を考へねばならぬ。大唐平百濟國碑銘と刻銘があるけれどこれは碑でなくて塔に雕つたものである。百濟時代建造の塔に唐軍が記念の銘文を彫り附けたものと見ねばなるまい。

邑の小學校の隣の考古品陳列館には百濟時代の遺物が蒐められてゐる。有名な金銅の小佛像や蓮花文ある古瓦に目を留めさせられた。像は高さ三寸、三尊佛で我が飛鳥時代の佛像を聯想せしめること深く、背銘には鄭智遠爲亡妻「趙思敬造金像」早離三陰」

の十六字が造像の由來を述べてゐる。論山への歸途忠清南道扶餘郡扶餘面陵山里第二號墳即

ち百濟王陵を傳へらるゝものを見る。蠟燭を照すこ天井には百濟末期に朱墨で書かれた蓮花文を飛雲が浮出している。四壁には青龍白虎朱雀玄武の四神を描いたらしいが白虎の頭部がかすかに見えるばかりである。

論山灌燭寺の境内には半島第一の大石像を謂はれる彌勒菩薩像が立つてゐる。傍の碑銘に據つて此像は身長五十五尺五寸、圍三十尺、高麗光宗の十九年に工を始め竣成迄に三十七年の歳月を要したことが知れるが、像其者は全體の均衡が齊はず藝術的價值には乏しいものである。一行の論山驛を出發したのは午後零時過ぎで五時半大邱に着いた。

十月二十四日 大邱市田氏所藏品―慶州博物館―瞻星臺
―石水庫―雁鳴池―皇龍寺址―芬皇寺―
掘佛寺四面石佛

大邱ではその道の豊富なコレクションを有する市田次郎氏を訪れた。主なるものを挙げるに、慶州、金海、扶餘、開城等各地出土の陶器で其中珍らしいのは「慶州長興庫」の文字ある鉢、高麗時代の陶印である。二、金具類では高麗時代の錫杖の頭部があつて、それには佛

像を陽刻し『王上壽萬歲』世子壽千秋』宗室各安寧』王妃壽齊？年』の銘がある。三、佛像。高麗時代新羅一統時代の佛像もあつたが、出色のものは百濟時代の小銅佛で高さ九寸藥瓶を持ち微笑を含みこの時代の優秀品といへるであらう。四、土器。新羅統一時代のものが多い。

午前十時大邱を發して慶州に着いたのは午後一時半諸鹿英雄氏の東道に依つて總督府博物館慶州分館に至る途中、金冠塚附近で偶然土器發掘の現場を見たのは一行の眼福を中心から喜んだ。慶州邑民の切なる希望を運動が具體化して設立された博物館はもと慶州府尹の政廳であつただけに古都の博物館としてはふさはしい結構である。温古閣を題する本館を入れば慶州附近出土の石器時代、金石併用時代、三國時代の遺物が並んでをり、それらに依つて原始朝鮮民族の生活様式を看取するに充分である。猶ほこゝには新羅統一時代の瓦磚、骨棺、陶器、骨壘や高麗李朝時代の陶器類や慶州府尹が練兵の際に使用した李朝時代の戒服及び組合式石棺があつた。學界の一大發見とされる金冠塚の發掘物は一度盜難に遭つて以來新館

の金庫内に秘められてゐるのであるが一行の爲め特に出して見せられた。金光燦然として輝く是等の遺物は實に驚嘆に値する。この外に如意輪觀音像並びに其他の石佛、石塔殘缺、異次頓供養塔、日時計破片等を納むる集古館があり。又博物館の鐘閣には藝術的價値の豊かな梵鐘が懸つてゐる。もも奉徳寺のものであるが後に靈妙寺及び鳳凰台下の鐘閣に移され更に現位置に將來された。富麗な寶相花文蓮花文及び雄麗な飛天像を陽刻してゐる。朝鮮に銅鐘の少ないのは新羅高麗時代に榮えた佛教も李朝に入つて排佛の厄に遭ひ銅鐘の如きも多くは鑄潰されたのである、迷信ではあるが墮胎の用として鐘を割るものすら生じて來た云はれる。

一行は數多くの大きな古蹟の間を縫つて慶州の古蹟巡りに出掛けた。墳丘は平夷せられても地平線下には墓室が存しその上に人家立ち島に耕されて居る所もある。蔚山街道を行く、瞻星臺、石氷庫、臨海殿址雁鴨池があつてそれらの傳説を秘めてゐる。蔚山街道を離れ路傍に轉落する瓦の破片に注意を向けながら歩むこも七八丁田

圃や人家の間に巨大な礎石が横つてゐる。即ち皇龍寺址である。三國遺事にはその緣起を述べて新羅第二十四眞興王卽位十四年癸酉二月將築紫宮於龍宮南、有黃龍現於其地乃改置爲佛寺號黃龍寺……高麗高宗十六年戊戌冬月西山兵火塔寺丈六殿宇皆災……高麗朝の時蒙古軍の丘火に罹つて燒失する以前の皇龍寺は宏大雄麗を極めたことが想像される。その金堂址と思はれる所には佛像の臺石が整然と列んでゐる。東京雜記卷二に皇龍寺。在月城東。今廢。只有丈六像と見え、これによつて寺院燒失後も尙ほ佛像をのこしてゐた事が知れるが、今は臺石を遺すばかりである。その配列から考へるに釋迦三尊の銅佛、十大弟子及び四天王の像があつたらしい。

皇龍寺址の北方約三丁で芬皇寺の塔を見る。東京雜記に芬皇寺。九層塔。新羅三寶之一也。壬辰之亂賊毀其半。後有愚僧。欲改築之。又毀其半。とあるものであるが、今は三層だけ遺つてゐる。安山岩の切石を以て方形に積上げ四面の入口には四天王像がある。日も暮れか、つた頃、一行は攝佛寺四面石佛を見る。

新羅三十五世景德王が地中より掘出したものご傳へられ石の高さ十三尺阿彌陀三尊の立像を刻してゐる。石の左右背面にも佛像が刻まれてゐる。この石佛に祈るミ子を授かるミの迷信を聞きながら一行は歸途に就いた。

十月二十五日(鮑石亭址—武烈王陵—博物館—掛陵)

九時半鮑石亭址に集合、鮑石亭はもミ王宮の一部に作られ新羅王が流觴曲水の宴を張つてゐた所ミ云ふ。五十世景哀王が妃嬪ミ共に置酒歡樂の最中、後百濟の甄萱に襲はれて忽ち杯盤狼藉修羅の巷を現出し新羅王朝の末路を飾る哀史が實にこゝに演ぜられた。物移り星變つて短徑十二尺長徑十八尺の鮑形の石楡を大樹の下に止むるのみである。鮑石亭の南方約五六丁の所にある三體石佛を見て武烈王陵へミ急ぐ。武烈王は唐ミ聯合して百濟を亡ぼし三國統一の基を闢いた英主で、その功業事蹟を刻銘した陵碑は碑身を失ひ今は轎首を載せた龜趺だけを存し「太宗武烈王陵之碑」の八文字が刻せられてゐる。且此の周圍四隅には礎石があつて碑閣のあつた事を知る、碑から數十歩隔つて墳丘がある。

午後は再び博物館を訪れ時間の餘裕を以て各自その好む所に從ひ陳列の佛像瓦磚、金冠塚其他遺跡の品々に就いて研究をなすミ、した。一行はこゝに與へられた特殊の便宜ミ厚意ミを謝し乍らおのがじ、寫眞拓本模寫等に與じて愉快な時間を送つた。

慶州を去つて佛國寺驛に著いたのは五時過ぎ。一行は自動車を掛陵へ飛ばせた。此陵は近頃に至り新羅第三十世文武王の陵であるミ唱へ初めたものである。陵の周圍に繞らす護石には十二支獸神像が陽刻されてゐる。參道の左右に列る石獸石人の類には唐式の影響を強く思はせ新羅陵墓の典型である。

十月二十六日(石窟庵—佛國寺—蔚山—釜山)

朝まだきに起き出でた一行は吐食山石窟庵まで約三十丁の坂道を登攀して石窟庵に達した。創建の年代に就ては據るべき記録は三國遺事中に新羅第三十五世景德王時代に大相金大城が現世二親の爲めに佛國寺を創し前世爺孃の爲めに石佛寺を創むミある。石窟内部には本尊釋迦如來の石造を始め周圍の石壁に半肉彫を以て刻した八金

剛力士、仁王、四天王、四菩薩、十大弟子、十一面觀音等の諸像があるが、新羅藝術の代表的遺品として有名である。三々五々山を下つて佛國寺を見る。白雲橋青雲橋の石階を登り紫霞門を入る。大雄殿や泛影樓がある。寺の創設は第二十三世法興王二十二年であるが景德王十年に修築を加へ大雄殿の前面左右に多寶釋迦の石塔を建立した。この二基の石塔一は二十尺一は二十七尺の高さを有し千有餘年の雨露に曝露されながら新羅時代其儘こおほしき麗姿を現してゐる。佛國寺には以上の一廓の外にその西に隣接する所猶ほ一廓の伽藍がある。

それより一行は蔚山へ向つた。蔚山驛に着いたのが一時半。公立普通學校長高橋隆彦氏の案内を煩はして蔚山城址の見學を行ひ、今より淺野幸長加藤清正等の軍勢が明軍の重圍に陥つて十二日間籠城の惡戰苦闘を續けた有りし跡を偲んだ。今尙ほ、本丸、二の丸、三の丸其外石垣、櫓、濠、追手門、搦手門の遺址等當時築城の片影を留めてゐる。

蔚山より釜山行の自動車は午後五時頃釜山に着いた。

思出深き朝鮮見學旅行も釜山市街の見物を最後として同夜一行は關釜連絡船の客となり、夜明けて下關に上陸、一先づ解散、無事京都へ歸還した。

以上往復十一日に亙る朝鮮見學旅行は豫期以上の成功裡に終了した。終にあたり斯の如く有意義な旅行を可能ならしむべく指導ミ好意ミを惜まれなかつた大方諸賢に對し心からの感謝を捧げて筆を擱く。

〔附記〕 此報告作成に就て西田教授の指導や佐藤學士、佐々木君の援助を受けたことを附記して謝意を表す。

〔向居〕

● 史學研究會

例會 五月十一日午後一時より樂友會館樓上に於て開催、左の兩君の講演の後、別室にて茶話會を催し午後六時閉會した。

亞米利加の博物館ミ支那の古美術

文學部講師 梅原 末治君

亞米利加諸州に點在する幾多の博物館の中から紐育メトロポリタン、ボストン、シカゴ、華府フリヤ、費府大學、加奈太トロント大學等の博物館や美術館に改藏さる

る支那遺物の主要なるものに就いて一々の寫眞を提示して解説を試み、特に支那古銅器研究の立場から見る興味ある論述を與へらるゝものが多かつた。

國分寺の衰頽に就いて

龍谷大學教授 魚澄愍五郎君

本號に掲載せられたるを以て略す。

◎讀史會

例會 三月十八日午後六時より樂友會館にて本年度

卒業生の祝賀晚餐會を開き、次に一號室にて左記卒業論文梗概の發表に引續き三浦西田兩教授の批評あり後中村牧兩助教授藤學士吉田君交々起つて感想を述べ十時散會せり。來會する者三十六人。

明治政府初期の宗教政策

田中 一三君

先づ徳川時代排佛思想の淵源發達を説き山崎派及び其系統を引ける薩摩藩津山藩の排佛と其後世への影響を述べ。次に明治政府の佛教抑壓を説き、神佛分離令に依る排佛毀釋の爲寺は政治經濟的に特權を奪はれたるを述べ次に大教宣布運動に及び、前期は神祇官時代にして儒者

にて行れ官僚的倫理的であり其原因は政府の人心安定策及び基督教との關係にして結局失敗し、後期は教部省時代にして政府の三條教則及びそれに對する佛教徒の反對を述べ宗教自由の發布は政府のあらゆる手段の不成功の結果なりと述べ。

室町時代に於ける武家階級に就て 寺尾 宏二君

先づ前期に於ける武家階級と比較し足利幕府の成立が自己的なりし爲めに微力なりし事を述べ、次に足利幕府は一元的優勝のために公家勢力の分散を圖りて天下を得たりしが、社會もために分散せり。又尊氏は恩賞政策を取りしが武家精神も恩賞によつて左右さるゝ傾向を示せりと説き、次に武家の土地領有經濟生活の變化が將軍家の内訌を機として應仁大亂を生じたる經過を叙し更に武家階級革新への道程として應仁大亂前後の主従關係及び土地に關する考の異なる所を挙げこゝに於て民政への關心を有するに至れりと述べ。

例會 四月二十六日午後六時半より樂友會館第一號

室に於て開催。三浦西田兩教授中村助教授其他四十八名

來會。左の研究發表ありて十時過散會した。

戰國時代前期に於ける本願寺の發展 山本 林君

下剋上の思想と物質主義とを以て特徴とする戰國時代は、新なるものを産む陣痛時代であつたから自己の體驗によつて一向宗に積極主義と現實主義とを取入れる事を念願した蓮如に取つては民衆との結合に絶好の時期であつた。蓮如の巧妙なる寺院經濟の運用と、熱狂的信仰とは彼れ自らは欲せざるにも拘はらず、生活の不安に脅されて居た庶民階級及び事あれかし願ふ無類の徒や、浪人をば一向宗の旗下に堅く結合させ屢一向一揆を起ししめ、その度毎に本願寺の勢力を北陸地方に發展せしめた云々。

信立の對農民政策

加計 敏吉君

甲州或は中部地方の領有に止らず、京都に皇室を擁して天下に號令せんとの大望を有せる信立は、富國強兵の實を擧げる爲、當時の主要なる財源を生む農民に對する政策に最大の關心を示した。甲州法度の大部分は農民に關する規定であり、その一々の規定は頗る巧妙で峻嚴に

寛大とを巧に使ひわけ、而も法の前には何者も力なきき様であつた。即ち租税の錢納、山口錢、木戸錢の如き種々の名目の附加税の徴收等、可能な範圍で出来るだけ多くの税を取り、一方孝子の免租・不正官吏の糺斷等の人心收攬策、或は又新墾田の免租、防水害工事の完成と云つた様な農業の種極的獎勵をも怠らなかつた。云々。

猶ほ今回は新學年最初の會合であつた爲め、西田教授より讀史會の由來について、それが明治四十三年十二月に呱呱の聲を擧げ、國史專攻學生先輩と教授間の懇親と學問の研究とを主として古文書・古記録の會讀に初つた本會は名附親なる三浦先生の指導の下に、次第に會員を増加し、内容を充實しつ、今日の如き研究發表機關となつた事を説かれ、三浦教授は又新たに國史を選べる會員に對して研究上の注意を與へられ、近時史學界に於ける文化史、經濟史、唯物史觀流行の新傾向が從來閑却されたる或方面の開墾と云ふ長所を持つと同時に、他面には或は政治軍事等の諸問題を輕視し、或は歴史事實のすべてを經濟的に解釋し去らんとするの短所を有する事も否

まれないから、兩者の長所を取つてそれ等の陥り易き偏見に捕はれざる事について警告された。

例會 五月二十四日午後六時半より樂友會館講堂に

開催。三浦教授中村助教教其他四十二名來會。左の研究發表ありて十時半散會した。

奈良朝に於ける遣唐使につきての一考察

武居 權内君

大陸強國の侵略を受くるには遠く、その文化を輸入するには遠からぬ云ふ、大陸に對して絶好の地理的位置にある我國は、異國文化理解の前提をなす大膽な態度を以て隋唐の文化殊にその中心をなす佛教文化を攝取し、前後に比類なき天平の佛教的文化を創造した。聖德太子の支那文物及び佛教輸入の主旨を繼げる遣唐使は表面上は平和の外交使節として、彼國に對し對等的自尊的態度を失はずして渡來したが、彼等が我文化史上に有する眞の意義は、奈良文化を實際上建設した云ひうる留學生の指導者であり、且又我佛教文化に劃期的の寄與をなしたる鑑眞以下の唐僧來朝の媒介者たりしにある。云々。

王朝時代の寺院制度の一二について

文學士 魚澄惣五郎君

本質的には私寺として我國に始れる寺院は、佛教の興隆と共にその數を増し天武帝の時にはこれが整理を必要とするに至り、奈良朝に入りては政教一致の制度の下に寺院は凡て官寺たるべし云ふ理想の下に國分寺條令が發布され、一方開墾制限を撤廢して官寺建立の達成を計つたが、實際は所謂定額寺の増加を招來したのみであつた。定額寺は朝廷を監理者とし國司の干渉を受けたが。國分寺とは異り資財張は施主が國司と共同して處理した併しこれも中央權力の衰頽に従ひ施主の獨裁に歸しその分布も平安朝には九州から東北に互つた。祈禱寺と菩提寺を性質上兼ねた定額寺は政治が藤氏一門の私的政治に移るや、藤氏と私の關係を結び益勢力を増大し、遂には單に寺格を高くし信仰を集める爲に朝廷と關係し、朝廷又收入を寺から仰ぐ状態になつた。勅願寺御願寺門跡寺院にもこれと同性質のものが多かつた。云々。

蓮如上人と時代思想管見

石垣 亮吉君

連如上人の宗教は權威と儀式を通じてのみ神に接し得るをなす從來の佛教に對立し、各人が個性に従つて神と直接的に交渉する事が出来るを主張する主觀主義個人主義の眞の宗教であつた。換言すれば王法爲本を云ふ現實主義又は自然法の觀念に基けるものである。併し一見俗的倫理を勧めるが如き彼の教義も本質的には超自然法に立脚して居る。さればこそ一向一揆と彼の結合が容易であつた。斯くの如き彼の思想は當時の文化の産物なる繪畫・茶屋建築・茶道・能狂言に表はれたる時代精神にも窺ふ事が出来る。云々。

● 明治史研究會

第二回例會 三月十三日夕より樂友會館第五號室に開催。三浦教授、牧助教、伊藤、山根學士、學生四名出席、左記の講演後、布村君の岩倉文庫文書整理に關する説明あり、會員間に意見を交換して十一時散會。

平等思想と徴兵制度

伊藤 八郎君

軍隊はその性質上一面極めて階級的であるが他面實力本位であるから平等的な色彩を多分に含む。幕末國防の

急務は舊來の武士階級のみを倚頼するを得なくなつたら兵民制度が眞摯に討究せられ諸藩中之を試み中には成績の見るべきものもあつた。維新後政府は徴兵制度を實施するに至つたが、それが庶民も兵士となり得るこの自覺を與へ軍隊内に平等思想を入れることとなつた。云々

第三回例會 五月十四日午後六時三十分樂友會館第五號室にて開催、會するもの牧、徳重、木島、原、布村諸學士及學生八名次の講演あり、十一時散會。

文學士 徳重 淺吉君

牧方願生坊僧法雲は大阪正徳寺僧教專と共に天保元年三月絶對鎖國眞宗禁斷の薩摩藩に潜入し、鹿兒島に滞在すること約六十日私かに眞宗を布教し事露はれんとするに及んで辛じて脱出した。當時大阪藝者公許され、上方咄がよるこばれてゐたから法雲等は上方咄に托して官憲の眼をかすめ容易に民衆に交り布教を試み得たのである。畢竟地方民の中央文化への憧憬を物語るものである。云々。

評論新聞に見えたる社會法律思想に就いて

文學士 牧 健二君
法學士

明治八年、三月集思社同人の手によつて發行された評論新聞は國家社會政治外交法律等各般の記事を載せ之に對し彼等の主張する自由民權の立場よりして寸鐵人を刺すが如き短評を加へたものであるが、彼等の立場は全然ルーソーの民約論であつた。而して彼等の忌憚なき論評は政府當局の忌諱する所となり明治八年六月新聞條例詭譎律の發布となり、九年七月太政官布達第十九號を以て國安を害するものとして發行を禁止された。時恰も西南役前風雲の急なるものがあり、自由民權の思潮も亦漲つてゐたからこの新聞も思想史乃至本邦新聞發達史より看過するを得ない。云々。

●西洋中讀書會

例會 一月二十八日 石田幹之助講師の歡迎、中原

與茂九郎先輩の送別、並びに卒業生送別を兼ねて新京極いろは亭に開催。濱田教授、石田講師、時野谷助教授、中原先輩を始め三十二名列席。鍋をついて快談に一宵

を過した。

例會 五月十日 新入生歡迎の意味で樂友會館に開催。時野谷助教授始め二十三名出席。左の發表あり。

十二三世紀に於けるフロレンスの經濟狀態ミレバヴリ

ツク 高橋 金也君

ヘカタイオスミヘロドトス 文學士 吉原 好人君

例會 六月十四日 樂友會館に開催。時野谷助教授

菅原先輩を始め二十一名出席。左の發表あり。

Oeiris 及びその Image 文學士 岡島誠太郎君

Worringer 著 Griechentum und Gotik

文學士 村田數之亮君

マナー 織田昌太郎君

●民族談話會

第十回例會 五月二十八日午後七時學生集會所に於

て開催、西田教授金關助教授其他卒業生學生合せて三十名出席左の講演あつた。

Wajang について 朝井小太郎君

Wajang はジャバ島に古くより行はれた影畫人形芝居

で、題材を彼等の祖先の惡魔や英雄に關する神話に取り、これによつて祖先の靈を招くのである。人形は主として水牛の皮にて作り手足に竹を付けて操る。演出の場合表情の變化を要する毎に人形を變へる。これに對し最近の事件を題材とする Odog、人形の代りに人間がする Wang Wong がある兩者共所謂 Wang 即ち Puwa の變化したものである。云々。

裸ミ羞恥心に就て

園原 太郎君

先づ裸ミ羞恥心が結びつくか否か、問題であるが、結び付くにしても、從來の學者の云ふ如く衣服を着るやうになつて羞恥心が起つたミする事は肯定出來ぬ。身體の部分により羞恥心を起す強弱のあるのではあるまいか、種々の例證より、私は裸は羞恥心ミ或程度の關係は持つが本質的必然的な關係はもたぬミ考へる。異性に對する恐怖心、科學的知識の程度、社會的統制にも密接な聯關がある。云々。

日本民俗學について

文學博士 西田直二郎君

吾國近時の流行の一なる郷土史は其内容の無味、方法

の非學問的の故に新なる研究法を必要ミ考へる。私は正しい民俗學的方法を郷土史研究に取入れる事によりそれを生かす事が出來、同時に非科學的な吾國の民俗學にも新なる生命を與へ得るミ思ふ。從來の大陸に於ける進化論的民俗學に對する米國 *Smith* 氏の批評は、心理的要素を輕視してゐる。しかし原始民族の習慣ミ文化民族の間に残れる習慣ミを同様に取扱ふことは大に注意を要する。日本に於ける *exact method* 野外探録にも注意すべき點多い。日本民俗學は方法の問題に新たなる考察を必要とする。云々

第十一回例會

六月十八日 於學生集會所

神樂に就て

文學士 佐藤 虎雄君

神樂には宮中賢所の恆例のものミ各神社のものに大別しうる。伊勢神宮の神樂は御備が行ふ民間の神樂として文獻上は垂仁天皇以來明治維新まで存續し以來今日の如き新形式を取るに至つた。明治以前ミ雖も、その間幾多の變遷を想像されるが、室町時代以後の儀例は確かに知る事が出来る。神樂の儀式の内吾々の注目を引くもの

は湯立の神事で、これは釜にたぎつた湯を箆につけて跋をする儀式である。舞は月經のない女子即ち十歳までの

小女か五十以上の女子が箆箆築和琴に合して舞ふがその舞女の胸にかける千。早なる紐は尙考察を要する面白い材料である。神樂歌の現存するものは三十七曲ある。明治

以後の儀式は湯立神事なき事、樂人の數少き事、樂器の種類を増加せる事等に於て従前と異なる。云々。

日本石器時代人の變形頭骸に就いて

醫學士 金關 丈夫君

頭骸骨の變化には自然的のものゝ人工的のものがある後者を惹起するモティフの一として、自分のクランのトリームへの類似を的とする事を擧げる事が出来る。我石器時代人の頭骸にも八巻狀の溝のあるものあり、アイヌは額に紐をかけて物を負ふ習慣を有し、頭骸の變化石器時代人に類似せるものがある、南洋に於ける同様の風習古來アイヌ系に云はれる琉球國頭及び奄美大島南半部更には言語學上アイヌの接觸を説かれるアメリカインヂャンに於けるそれ等は未だ學問的立證はないが、興味的にアイヌ南方系説に加擔せしめる。云々。

會 報

寄贈交換圖書

- | | |
|--------------------|------------|
| 武家時代の研究(大森金五郎著)第二卷 | 富 山 房 |
| 平安南北道の方言 | 京城帝國大學法文學部 |
| 史學雜誌 四〇の五、六 | 史 學 會 |
| 東洋學報 十七の四 | 東洋協會學術調查部 |
| 國學院雜誌 三十五の五 | 國學院大學 |
| 歴史地理 五三の四、五 | 日本歴史地理學會 |
| 人類學雜誌 四四の四、五、六 | 東京人類學會 |
| 考古學雜誌 十九の四、五、六 | 考 古 學 會 |
| 史 學 八の一 | 三田史學會 |
| 國史と國文 五一、五二 | 立命館大學 |
| 經濟論叢 二八の四、五、六 | 京都帝國大學經濟學會 |
| 龍谷大學史學會々報 三 | 龍谷大學史學會 |
| 宗教と藝術 一〇の二 | 龍谷大學内同社 |
| 史 苑 二の一 | 啓 明 社 |

社會學雜誌 六一、六二二 日本社會學會

博物館研究 二の五、六 博物館事業促進會

史蹟名勝天然記念物 四の五、六 同保存協會

眞宗學報 五 眞宗專門學校

伊豫史談 五六、五七 同史談會

東北文化研究 一の六、二の二 同史誌出版社

刀劍研究 十五の五、六 同南人社

商業と經濟 九の二 長崎高等商業學校研究館

史學雜誌 一の二、二二 同南京中國史學會

On pu Hinou-Kōng (J. Kuwabara) The Jōyo Banko

The Sumorian Faklots (Y. Nakahara) The Foyo Banko

T'oung pao Vol. 26 Paul Pelliot.

東京市外高田大原一五七〇 佐藤 堅司氏

(右紹介者時野谷常三郎氏) 丸山 敏雄氏

廣島文理科大學國史研究室内 小倉 豐文氏

同 岡田 豐氏

同 北川 鐵三氏

同 岩間 武雄氏

同 (右紹介者栗田元次氏)

東京小石川區大塚町窪町 東京文理科大學史學研究室

(右紹介者中山久四郎氏)

京都市岡崎東天王町八十四 横山 鑑氏

(右紹介者中村直勝氏)

京城府和泉町官舎三號 稻葉 岩吉氏

●會員 動靜

●加入 會

三重縣神宮皇學館 佐々木利三氏

(右紹介者佐藤小吉氏) 同

京都市吉田第三高等學校 小玉 與一氏

(右紹介者那波利貞氏) 同

京都帝國大學文學部史學科 武居 權内氏

同 杉岡 憲一氏

同 長部 和雄氏

同 野部 長養氏

同

上田敬一郎氏

出口 勝行氏

保木 俊雄氏

古谷 綱隆氏

同

宇都宮清吉氏

山田安次郎氏

岩見 護氏

石井直三郎氏

同

鹽入 進氏

井上以智爲氏

高橋 勝一氏

小泉 顯夫氏

同

鹽見 高年氏

島 文次郎氏

山川七左衛門氏

吉川 義雄氏

同

森 義雄氏

橋本 義逸氏

中川 泉三氏

溝江小八郎氏

同

矢部 周藏氏

行徳 曄愛氏

楠 正雄氏

佐々木龍作氏

同

増村 宏氏

逝

去

同

佐藤 賢氏

井上 彖雄氏

島崎 良忠氏

八木繁四郎氏

同

會田建二郎氏

右謹みて哀悼の意を表す

同

有働 賢造氏

同

三國谷 宏氏

同

二宮 善夫氏

同

青木 重保氏

同

三森 定男氏

同

井上 速雄氏

同

齋藤 忠夫氏

大阪市外石橋浪速高等學校

京都市北白川追分町四二中野方

(右紹介者島田貞彦氏)

退 會